

(銀のエンジェル賞 中学生の部)

一生友達

中三・若林 明日香

これはいじめを撲滅するためにつくられた臨床心理実験の映像です。

極めて仲の良いクラスに『いじめっ子役』『傍観者役』『いじめられっ子役』の三つの役を与え、一ヶ月間生活して頂きました。

いじめっ子役は五人、傍観者役は二十人、いじめられっ子役は一人の全員参加型です。

いじめっ子の五人には、権力を持つ順に一から五の番号をつけ、グループ内でのカーストを位置づけました。

傍観者にも役割をつけました。十五人はいじめを黙認し、いじめられっ子とは口を利いてはいけない。しかし、残りの五人は口を利いても良いが、いじめっ子から必ず制裁を受けなければならない、というものです。

教師には、口を利くのは良いがいじめを見て見ぬふりをする、という役割を与えました。

そして配役ですが、いじめっ子のボスはクラスのリーダー的存在。人情深く正義感の強い『琥好風斗くん』。いじめられっ子はその風斗くんの幼馴染で親友でもある『八神悠叶くん』に与えられました。一見大人しそうですが、風斗くんの親友ということもあり悠叶くんもクラスの中心人物です。

一通り説明が終わり、映像が静かに再生された。画面越しの二人

の少年、八神くと琥好くんは心を許し合っている仲なのだと一目見て理解できた。

最初の一週間、琥好くんは学会の人間から嫌がらせの内容を決められていたようで、ごめんと謝りながらも、様々な方法で恥をかかせたり、軽い暴力も振るわせていた。しかし、クラス全員こっそり笑い合いごっこ遊びを楽しんでいるように見えた。

変化が起きたのは、三日目放課後。琥好くんが足を引っかけると予想以上に八神くんが転び、膝小僧から大量に流血した。中々起き上がれず、痛い痛い呻き声を上げる八神くんに苛立ったのか、琥好くんが舌打ちをしたのだ。

そこから、流れが大きく変わった。

ムードメーカーだったはずのクラスのリーダー、琥好くんが常に苛立っているようにみえた。同じ役職のいじめっ子達は、琥好くんの顔色をうかがい一喜一憂するようになり、傍観者達は沈黙するようになった。

常にいじめっ子役の五人は固まって動くものだから、『クラス内で頂点のグループである』と無意識のうちに誇示こじされたように感じた。それに比例し、八神くんの孤立は明確なものになった。

ごっこ遊びの魔法が解けるはずの下校の時間でさえいじめっ子グループの五人で行動し、かつての親友であった八神くんを見てわかるレベルでいじめるようになった。

クラスの支配者としてどんな非道で高慢な行いも全て許され、且つクラスの人気者。

八日目からは、学会からの指示を無視し勝手に嫌がらせをするようになり、手の付けられない暴走を見せた。

ここで、傍観者の動きだが口を利いてもいい役割の傍観者はちら

ほら励ましの言葉をかけていたものの、振りかかる制裁や悪口に八日目からついに誰も手出しが出来なくなってしまう。いじめっ子五人グループに嫌われたら生きていけない、そう判断したのかもしれない。

口の利けない傍観者は、当たり前のように無視を続ける者、口の利ける傍観者に対し八神くんを助けるように責め立てるような動きが見られた。

しかしながら、一番注目すべきなのはいじめられっ子の八神くんへの何の変化もないこと。周囲の変化が大方予想通りなのに対し、彼の冷静さにだけはどこか違和感を感じた。

そして運命の折り返し地点、十五日目。

月曜日、八神くんは何食わぬ顔で登校してきた。琥好くんを筆頭に、五人グループは早速彼の外見や動作に対し悪口を言っていたが。八神くんは気にしていない様子だった。

ここまで不登校にならず耐え抜いた被験者は何人かいたが、こんなにもダメーজのない被験者は彼のみであった。

そしてモニター実験の折り返し地点、学会の人間は映像の中で子供達に非道な報告をする。

「本日から、いじめっ子といじめられっ子の配役のみ、交換します」琥好くんはこの世の終わりのような顔をしていたがすぐ立て直し、ぎゃんぎゃん罵声を浴びせ、実験をやめてやると抗議した。しかし、最初にサインを書かされていたらしく反論は虚しく終わる。もし規律を破れば何らかの罰を受けることになるかと脅されていた。

八神くんは突然の通告に目を見開き動揺したようだが、しばらく考えた後いつもの顔に戻り、学会の人間に向き合う。

「すいません。俺は風斗をいじめません。何を言われても、例え命

令だとしてもきけないです」

その言葉に、琥好くんは心底驚いたようだ。

「これ、規則違反にはならないです。結果が十五日早く出ただけ。だって俺はいじめない、なにがあっても変わらないから」

学会の人間は、なぜそれが分かると問いかける。子供へではない、一人の人間への対応だ。

「確かに最初は辛かったけど、風斗の変化は人間として当たり前的事だと知ったから」

「当たり前、ですか？」

「はい。俺の兄は心理学を趣味で学んでいて兄から知識を借りました。今学校で行われている実験は『スタンフォード監獄実験』と『ミルグラム実験』によく似ていると。今の皆はこの二つの心理実験の結果とほぼ同じ状態」

学会の人間は一つため息を吐く。確かに、その二つを参考にした実験ではあったが、力を持つものと持たぬ者の権力交代、それに生じる全体の変化はまだ計り知れていないと、あくまでごっこ遊びを続行させる旨を述べた。「俺はいじめない。でもきつと、風斗だってそう思っていた。風斗はいつも俺を助けてくれる優しい奴だったから。でもそんな奴があそこまで変わってしまった。だからこそ、もしかしたら自分もいじめてしまうかもしれない、というのが本心です」

「ごめん。本当にごめん悠叶。オレ、どうかしてた。最低だ」

「最低じゃないよ。だって心理上仕方のないことだったんだから。自分だって、兄がいなかったら同じことをしていた」

先程から度々登場してくる兄の存在。もしかしたら、八神くんはずっと第三者に相談し続けていたのかもしれない。

「俺はたまたま、相談できる相手が近くにいてくれた、本当にいじめられた気になって、風斗や皆が嫌いになりそうだったけど。でもこれはいじめじゃないと、心の支えになってくれていた人間がいたから。だからやっぱり、俺はいじめないと思います」

映像は不自然にも、ここで終了していた。この映像は結局未完成のまま、お蔵入りとなっていた。僕の役目は映像を完成させること。僕は彼らがどうなったのかが気になり、夜も眠れなかったので思い切って二人を取材することにした。

「ああ。あの時の学会の仲間か」

中学生になった琥好くんは、怪訝そうな表情でこちらを見た。

「風斗。睨むなよ。えっと、あの時は実験をめちゃくちゃにしてしまい、すいませんでした」

礼儀正しく挨拶したのは、当事者の八神くん。どうやら二人は同じ中学校に進んだようだ。

「いや、いいんだよ。あれはあれで一つの結果だったからね。それよりも、二人が仲良くてよかった。あの実験で絶交している子がいてね。心配していたんだ」

「最低な実験だったな」

琥好くんが吐き捨てるようにそう言った。

「ごめんね。でもあの実験はいじめを少なくするための第一歩だったんだ。あの実験の映像を全国の子供たちに見せ、いじめに関わる全ての人間の細やかな心情と残酷さを知ってもらおう。でも、君達の映像だけお蔵入りなのはちょっと勿体ない気がするね」

別にお蔵入りのままでいいですよ、と八神くんが笑った。

「俺は風斗をいじめずに済んでよかった。でも、一番心残りなのは風斗がずっと罪悪感を抱いていること。俺はいじめられた感覚がな

いから後腐れないけど、凧斗は本気でいじめてたという記憶が残っている。それが今の俺達です」

これ以上は何もないので、関わるのは今日が最後にしてほしいと告げられた。

「そっか。わかりやすくまとめてくれてありがとう。二人の絆は深かったんだね」

「はい。俺と凧斗はずっと永遠に友達です」

美しい友情。でも何故だろう、二人の間にずっと黒い何かを感じている。

結局映像はお蔵入りのまま、物置部屋の奥にしまわれることになった。

「凧斗、今日ゲーセン行かないか」

「……ああ！ もちろん」

今日凧斗は塾だ。でも凧斗は必ず俺と一緒に遊んでくれる。

「凧斗、お年玉全部持って来いよ。俺も持ってくるからさ」

「おう……。分かった」

これから先、何があっても凧斗は俺の友達でいてくれる。これは、いじめでも支配でもない。ただ勝手に凧斗が罪悪感に縛られているだけ。

昔の関係じゃないけれど、でも今の関係のほうがずっと心地よい。いじめっておそろしい。だって二度と元には戻らないのだから。
